

都城市議会議長様

令和 7 年 10 月 31 日

管内研修報告書

1 会派 : さくら会

榎木 智幸、 中村 千佐江

2 観察先・テーマおよび日時

令和 7 年 10 月 23 日 (木) 9:00~11:00

場所 ; 大石製茶園様所有茶畠 (乙房町)、尻枝地区自治公民館

『都城市における茶業の現状と課題について』

～四日市市議会有志のみなさまと一緒に観察・意見交換～

3 内容

さくら会 2 名と、四日市市議会の議員 5 名 (樋口龍馬議員、谷口周司議員、上まり議員、今村厚美議員、伊世とし子議員) の計 7 名で、大石製茶園・大石春樹様を講師に研修会を行った。

まず始めに、大石製茶園様所有の茶畠 (乙房町) に案内していただき、お茶の栽培と収穫について説明を受けた。茶の生産における ICT 活用について触れられ、静岡県などの大規模な茶畠では生産管理に ICT が活用されており、点在する茶畠を管理するための情報が共有でき、導入すれば省力化が図れるが、現状としては経営面で難しいとの話であった。お茶の木は 2 年も放置すると元の状態に戻すのが難しく、継続的な管理が必要であり、後継者の育成は待ったなしの状態である。

また、スズメバチやイノシシなどの野生動物による被害も報告されている。

40 分ほどで畠から尻枝公民館に移動し、参加者間で意見交換を行った。

四日市市は、茶の生産量が全国 3 位の茶所であり、「かぶせ茶」が主流である。かぶせについては、都城市でも盛んであり、茶畠で大石氏から説明があった。四日市市が運営する茶業振興センターには、小学 5 年生が社会科見学に行くことになっていて、市民にとってお茶が身近であると聞いた。また、お茶産業が生産者と小売業者が直接結びついており、各生産者が個性的な原料を生産し、それが販売店の好みと結びつくことで、特定の農家から仕入れるという慣習が強いと説明があった。

一方、本市については、行政と生産者間の連携不足について言及した。お茶の輸出シンポジウムが開催されても生産者に情報が届かず、行政側が販売側ばかりを重視し、生産者の意見が取り入れられない状況があるのでとの指摘があった。ただし、このような連携不足は、農業全体に共通する問題であると認識を共有した。

また、輸出に関し、農業法人化の計画と融資について言及があった。国の事業と連携することで、高額な設備投資の半分を国が負担する見込みである。

海外市場、特にドイツでの有機茶の需要の高さについて、話が及び盛り上がった。ドイツは、消費者が有機製品を求める傾向が強く、環境配慮への意識が高いが、ヨーロッパ全体で有機栽培が普及しているわけではないという話であった。ドイツの商社が、日本茶、特に有機栽培の茶葉に強い関心を示しており、全て買い取られて量が不足している様子である。

有機茶に対しては、国内でも需要が高まっている。しかし、有機栽培のお茶は非常にデリケートで保存が難しく、開封後は賞味期限が短いという課題がある。

また、茶畠全般として、竹の侵入や外注対策、水管理と言った課題が複数挙げられ、茶を製品化する機械のメンテナンスを行う技術者も併せて、業界全体の高齢化も課題とされている。若い世代が茶農家を継承したいと思うためには、収入の安定化が必須である。

4. 研修の感想

三重県四日市市から来られた5人の議員の方々から、四日市市の茶業の状況を伺いながら全国でお茶の生産量が全国で3位であることに驚いた。工業の盛んな街というイメージがあっただけに、自分の認識不足を恥じた。その茶業を盛り上げるために、議員連盟を設立されており茶業に対する熱心を感じた。講師の大石さんから、都城茶の現状と課題等を伺えて、盆地の地形がお茶栽培に適していることやお茶の種類が多くあること、機械の導入に経費がかかること、大型飲料メーカーとの契約、さらには少量で付加価値の高いお茶の生産状況などを伺い、大きな学びの場となった。四日市市議団の皆様からも専門的な多くの質問が出るなど私たちも有意義な研修となった。

5. 研修の成果および市政への反映

研修を通じて、本市の茶業への関わりが薄く感じた。他の農家と同じく高齢化や後継者・機械導入の高齢化など多くの課題を抱えておられた、四日市市では行政が茶業に積極的に関わりを持ち茶業の支

えとなつてはいると伺つた。本市でも、茶業の認識と関わりを深めてもらひ「盆地のお茶」が特産品として全国・世界に発信できるよう育つていくよう努めてもらいたい。

<中村千佐江>

4 研修の感想

まず、単純に三重県四日市市がお茶所だったことに大きな衝撃を受けた。

四日市市議会からお越しの5名の皆様においては、昨年に続き、有志での視察にて、多い方は約2年間で3回目のご来訪となり、本市を気に入ってくださったことに対しありがたいの一言に尽きる。

茶所都城として、お茶をどう取り扱うのかを個人的に調査し始めたタイミングで、四日市市議会からお茶での視察の申し込みがあり、講師の大石氏も、他市の取組を議員を通して知る機会を得て大変勉強になったと喜ばれていた。業界の中で勉強するのと、議会の目線で勉強するのは少し切り口が違うのだろうと感じた。私自身、思いがけず知識に広がりを得られたと思う。

まだまだ勉強したいことがたくさんあるので、引き続き、調査研究を続けたい。

5 研修の成果および市政への反映

四日市市が持つ茶業振興センターという施設や仕組みを、今後、本市でも整備するのは現実的でないと思うが、地元のこども達が茶をもっと身近に感じるための取組は必要だと考える。市民がお茶を飲む仕掛けについて提言に繋げたい。

本市のお茶の取扱いについて、市としてもっと積極的かつ体系的に、業界全体に対して関わっていくべきではないかと考えている。少なくとも、戦略ないし方針を持つべきであり、その考えについて問いたいと思っている。

